

いなかおカ VI



2002 No.142

東京都世田谷区歯科医師会会報



東南アジア旅行の知的楽しみ方

「インド化」された国々へ 遺跡の旅—XIV

下馬部会 斎藤賢一

インドネシアのジャワ島中部にある、ヒンドゥー遺跡については以前にお話ししました。今回は中部ジャワの仏教遺跡についてお話ししたいと思います。まずは世界的に有名なボロブドゥールへ行きましょう。中部ジャワのジョグジャカルタ市から車で1時間の所にあります。ボロブドゥールは寺院ではありません。自然の少丘上に人工的に盛土をした土饅頭を安山岩の切石で覆った物です。全部で5層からなる方形の基壇で構成され、その上に更に3層からなる円壇が乗りその最頂部に釣り鐘状の仏塔が乗っています(写一1)。この仏塔の中に何



写一1「ボロブドゥール」鳥瞰写真 蔵野幸雄が入っていたかは解りませんが、仏舍利が入っていれば、仏塔(ストゥーパ)ですし、王の遺骨が入っていれば霊廟です。建立は8世紀の終わり頃から、9世紀の中頃までのおよそ75年かけて、当時この中部ジャワ一帯を支配していたシャイレンドラ王朝によって作られたと思われます。ここの楽しみは、下の階層から回廊の両側壁面に彫刻されている、仏の教えを見ながら上へと登ってゆき、最上部から眺める眼下に広がるジャワの大自然です。第1回廊壁面にはブッダの生涯を表す仏伝図と、ブッダが前世においてなされた様々な善行を説いたジャータカ(本生話)が彫刻されています(写一2)。2、3回廊壁面には「華嚴経」からとった、善財童



写一2「ボロブドゥール」第1基壇の彫刻子と呼ばれる青年が次から次へと聖者からよい知恵を授かる巡礼の物語です。第4回廊には、普賢菩薩の姿が彫刻されています。この上には円壇の上に小さな仏塔がたくさん建てられおり、中に座仏が安置されています。また各回廊の上部には仏龕があり、中に仏像が座っておりますが、東西南北では手の形(印相)が違います(遺跡の旅XI写一10)。この手の形によって仏像の種類が解ります。東側には触地印の阿閼如来、西側には禅定印の阿弥陀如来、南側には施与印の宝生如来、北側には施無畏印の不空成就如来で最上部の円壇の上は、すべて転法輪印の釈迦如来です。この様な配置によって、ボロブドゥールは立体マンダラと言われます。また第1の基壇の下には、補強工事の際に埋められた基壇があり、一部だけ掘ってあり、見ることが出来るようになっていています(写一3)。そこには人間の善行悪行についての彫刻が見られます。おそらく当時はこの一番下の回廊の彫刻、すなわち我々が生きている現世から、第1回廊のブッダの生涯を経て、第2、3、4回廊の仏の教えを見ながら最上部に達したときには、人が生きていく上での真の意味を見いだせるように作られていたはずで

ボロブドゥールの東西面を起点として、一直線上に同時期に建立されたチャンディ・パオン



写一三「ボロブドゥール」隠れた基壇の彫刻とチャンディ・ムンドゥと言う寺院があります。この並び方には宗教的意義があるのか、偶然なのか解っていません。

チャンディ・ムンドゥは800年頃、シャイレンドラ王朝によって建立され、内部には中部ジャワ彫刻の傑作と言われる釈迦三尊が安置されています(写一四)。また入口の左右にはこれも傑作と言われる、鬼子母神(遺跡の旅XI写一11)と毘沙門天(写一五)の二面の彫刻パネルがあります。外壁には様々な密教の菩薩が浮き彫りされており、小さい寺院ですがとても見応えがあります。



写一四「ムンドゥ」釈迦三尊



写一五「ムンドゥ」毘沙門天

チャンディ・パオンはとても小さな寺院で、内部には何もありませんが外壁に表された、天界の聖樹(カルパタール)や半人半鳥のキンナラ、キンナリーが有名です(写一六)。屋根はオランダが復元するときに創作してしまったのが悔やまれます。



写一六「パオン」聖樹・キンナラ・キンナリー
ここからさほど遠くない唐辛子畑の中に、チャンディ・ヌガウエンがあります。かつては5つの祠堂がありました但现在は1つだけ残っています。この残っている祠堂の外壁の仏龕にとても素晴らしい彫刻があります。龕の中には何も残っていませんが左右には門神(ドゥパラパーラ)が、下部には天人が彫刻されています(写一七)。



写一七「ヌガウエン」壁龕の彫刻

いったんジョグジャカルタに戻り、東へ車で30分ほど行ったプランバナン遺跡群に行きます。ここにはヒンドゥー遺跡の時に訪れました(遺跡の旅-V)が仏教遺跡も沢山あります。

チャンディ・カラサンは778年建立ですが、今日見る建物は9世紀前半のもので、この寺院の特徴は外壁の上の漆喰に掘られた装飾浮き彫りです。特に南側入口の上部にある鬼面カー

ラと、その周囲の文様が素晴らしい出来です(写-8)。入口の左右にある門神(ドウバラパーラ)



写-8「カラサン」カーラの彫刻

も見応えがあります。この建築はチャンバ遺跡(遺跡の旅-X)でお話したヒンドゥー寺院に非常に似ており、チャンバにおけるインドネシアの影響がうかがわれます。またチャンバ人のルーツはインドシナの人々とは異なりインドネシア人と共通していることも関係しているかもしれません。

チャンディ・サリはカラサンのすぐ近くであり、9世紀前半の建立で、3階建てです(内部は2階)。開口する窓を持っているので、僧房(ヴィハーン)か経蔵ではないかと思われます(写-9)。内部には何も残っておりませんが、



写-9「サリ」

外壁に掘られた、楽器を持ったり、頭上に蛇(ナーガ)をのせた天界の天人たちが生き生きしています。

チャンディ・セウは千の寺院を意味し、境内

は185m x 165mの方形で中央に大きな祠堂を設け、その周囲を200以上の小さな仏堂が取り囲んでいましたが、現在はほとんど崩壊して瓦礫の山になっています。中央祠堂から修復が始まり、全て完了したあかつきにはボロブドゥールに勝るとも劣らない規模の遺跡になると考えられます。建立は8世紀の終わりから、9世紀の初めにかけてです。この見所は奇跡的に残っている仏堂の彫刻と寺院の入口にある巨大な門神(ドウバラパーラ)です(写-10)。



写-10「セウ」門神ドウバラパーラ

チャンディ・プラオサンもセウと同じく広大な寺域を持っていましたが、ここもほとんど崩壊して現在残っているのは、道をはさんで北側にサリと良く似た祠堂が二つ(完全なものは一つ)と、南側には小さな仏堂が一つ建っています。北側のサリに良く似た祠堂は3階(内部は2階)建てで、内部は3つの部屋からなっており、それぞれの部屋に3体の仏像が安置されています。まず中央の部屋はムンドウの三尊と同じですが、中央のブツ像は後世持ち出されてしまい、観世音菩薩と金剛手菩薩が残っています。右側の部屋も中央の仏像はなくなり、文殊菩薩と虚空蔵菩薩、左側の部屋も同じく中央がなくなり、地藏菩薩と弥勒菩薩が安置されています(写-11)。またこの左側の部屋にはクメール(カンボジア)帽子をかぶる男女の浮き彫りがあることから、インドネシアとカンボジアの関係がうかがわれます(写-12)。外壁にはサ



写－11「プラオサン」内部仏像



写－12「プラオサン」クメール帽子の男女
りと同じ様に美しい天人像が彫刻されていま
す。

チャンディ・サジワンは鉄道線路の近くにあ
る9世紀の寺院ですが、基壇を残しすべて崩壊
してしまいました。しかしこの基壇の側面に
ジャータカを主題にしたすばらしい動物の彫刻
が一周しています(写－13)。



写－13「サジワン」ワニに乗るサル

以上中部ジャワの代表的な仏教寺院を見てき
ましたが、インドの影響がかなり強く表れてい
ます。しかしポロブドゥールはインドでもその
原型が全く存在しない、斬新な建築でジャワ独
特のものであります。それを設計した天才建築士と、
見事な意匠を持つ職人によって作られた立体マ
ンダラです。10世紀になると、政治の中心が
中部ジャワから東部ジャワに移ります。その理
由は中部ジャワにそびえ立つ聖山メラピーの噴
火によって多量の火山灰がふったり、地震や疫
病の流行など色々な説があります。いずれにし
ても10世紀以降の遺跡はほとんど作られな
くなりました。東ジャワの遺跡についてはいずれ
の機会にお話ししたいと思います。

中部ジャワの食べ物に関しては、あまりお勧
めするものではありません。ほとんどの料理が甘
く、脂っこい料理で東ジャワやバリ島の料理に
比べると見劣りします。ただソト・アヤムと言
われる鳥のスープは、とても美味しくこれにご
飯をいれたり、麺をいれたりして食べます。中
部ジャワでは是非見ていただきたいのが、ワヤ
ンと呼ばれる影絵です。「ラーマーヤナ」や「マ
ハーバーラタ」のインド二大叙事詩をインドネ
シア風にアレンジし、ガムランという音楽にの
せて演じられます。ガムランはバリ島が有名で
すが、これが動のリズムに対しジャワ島は静の
優雅なリズムです。かすかな芳香を含んだ熱帯
のねっとりした空気の中で、幻想的なワヤンの
シルエットと、たゆたうガムランのリズムに包
まれながらジャワの夜は更けてゆきます。